一～八二頁）

朝鮮人にたえず「皇国臣民」としての完成を求め、ついには「皇国臣民」であるあかしとして、「天皇のために」生命を捧げることを求めるのが、皇民化政策の真のねらいであったといえよう。

おわりに

本稿は、朝鮮植民地支配と天皇制との関係について、その概略を示したものにすぎないが、天皇制権力の下での朝鮮植民地支配の実態について、読者の関心を呼びおこすことができたとしたら、幸いである。

（新潟大学人文学部）

〔表紙のことば〕

おこられ下手

那須　高明

提出期限を守らない、遅刻をしても言い訳もしないでガタンと音を立てて席につく、清掃している廊下の掃き集めたゴミを平然とふみちらして歩いてゆく、校庭の草とりは立ち話ばかりで仕事はすすまない、連絡事項はうわの空。注意したり、小言をいったり、説教したりの連続で自己嫌悪に落ちいりそうになる。生徒にしてみれば家でも学校でも小言の洪水でうんざりだろうとは思っても、やっぱり見すごせない。ところが注意をすると十中八九、うらめしそうな目でにらみ返してくるか、無視して逃げる。こんなときが教師として一番つらい。怒り声やどなり声では教育は出来ないとわかっていても、時には大声を出して怒る。怒られた方はますますふてくされ、態度を硬化させる。

そんな日は空しい敗北感だけが残る。

僕らが生徒の頃は、先生にしかられた時は神妙な顔をして頭を下げた。時には不当なおしかりの時も、たいていはそうだった。しかし、どうしても納得できない時は、自分の精一杯の能力を動員して弁明し、抗議をしたものだ。

結果として、その先生との親近感さえ生まれたものだ。ところがこの頃はそううまくはいかない。生徒ももっとしかられ上手になってくれたらなあと愚痴ってしまう。

考えてみれば、しかられ下手の生徒を責める前にしかり上手になるのがプロとしての教師の仕事なのだろうなあと思う。周りを見ればそんな教師がいることに気づく。教師生活もあと何年もないこの頃、まだそんなことに悩んでいるようではなさけないと思う。

（なす　こうめい＝長岡大手高校）